

大手前大学 数理・データサイエンス・AI教育プログラム リテラシーレベル

令和5(2023)年度 自己点検・評価

自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	<p>「情報活用 I」は全学必修科目のため1年生は全員履修する。「AI・データサイエンスの扉」は、全学を対象とする総合科目群に配置し、eラーニング科目として春学期、秋学期に開講している。eラーニング科目についてはLMSで学習状況等を把握することができるため、学習状況が芳しくない学生に対しては注意を行い、ドロップアウトの防止に努めている。</p> <p>2023年度の履修状況は、以下のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「情報活用 I」: 履修登録者数744名、合格者数708名</li> <li>・「AI・データサイエンスの扉」(春学期)履修登録者数165名、合格者数154名 (秋学期)履修登録者数263名、合格者数240名</li> </ul>
学修成果	<p>本プログラムの学修成果は、自己点検・評価委員会にフィードバックされ、同委員会において自己点検・評価を行う。また「情報活用 I」についてはコア教育連絡協議会主催の学習成果報告会にもフィードバックされ、学長、副学長、教務部長らからの評価を受け、その結果をもとに情報分野の科目を担当する複数の教員らから構成するカリキュラム会議にて授業内容などについて検討を重ね、当該科目の授業デザインの見直しや情報系の他科目との最適な連携など、情報教育全体で成果が出せるように努めている。</p>
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	<p>本学では、春・秋学期により良い授業となるよう、授業改善を目的とし「学生による授業アンケート」を全科目を対象として実施している。本アンケートでは学生の理解度を問う設問もあり、自由記述欄を設定し学生は授業に対する様々な意見を記載できる。「AI・データサイエンスの扉」においては、「AIデータサイエンスがどういうものなのかを理解できた」など学習理解を示す回答や「非対面授業なので、自分のペースで課題に取り組むことができた」などeラーニング形式による学習効果を確認するコメントが多数見られた。また、教員は学生が記載したことに対してフィードバックを行い、相互において授業への理解度等共有をはかっている。</p>
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	<p>学生による授業アンケートの結果は、LMS上に公開され、全学生と教職員が閲覧可能である。未履修の学生もこれを通じて授業内容への理解や興味を深め、履修への動機付けが期待できる。「AI・データサイエンスの扉」の履修者に対するアンケートでは、後輩や他の学生に科目を勧めたいか尋ねたところ、「勧めたい」が43.8%、「どちらかといえば勧めたい」が51.6%という結果が得られた。これはプログラムの魅力が伝わり、同科目の広がり示す肯定的な回答と捉えている。</p>
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	<p>「情報活用 I」は、本学の総合科目の中に全学必修科目として配置されているため、履修率は100%となる。また、「AI・データサイエンスの扉」は、学部の専門科目の履修の妨げにならないようにeラーニング形式の選択科目として配置し、履修をし易くしている。次年度は受講対象学年が1年、2年、3年と増えるため履修者の増加が見込まれる。引き続き、履修オリエンテーションにてきめ細かく説明し、学生の興味を刺激し履修率の向上につなげていく。</p>

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	<p>プログラム修了者はデジタルスキルや統計スキルを磨き、優れた就職準備ができ、広範な業界や職種での活躍が期待されている。また本プログラムを経て資格への興味が広がり、多様な資格取得によりさまざまな進路が拓けることも期待している。本学主催の業界説明会では、企業の人事担当者から「データサイエンス・AI」に対する重要性について多くの関心が寄せられており、本プログラムが今後の人材養成において不可欠な役割を果たすことがうかがえる。</p>
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	<p>本学独自の制度として「教育ボランティア」制度があり、産業界の方や様々な方に、本学へ登録いただき、学生の授業での様子を参観していただいたり、プレゼンテーションの審査、個別面談(3年生を対象)などを担当いただき、学生の伸長度の可視化を図っている。さらには地元の中堅企業及びグローバルに事業展開する大企業等約20社の協力を得て取り組んでいる「人材育成構想会議」の場も活用して産業界の意見を拝聴していく予定である。</p>
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	<p>本プログラムにおいては、「情報活用I」は1年生の春学期に全員が履修する科目であるが、その授業の中で様々な演習学習を通じてデジタル活用の楽しさを伝えている。また選択科目の「AI・データサイエンスの扉」ではデータやデジタル技術の具体的な活用事例を学び、デジタル活用力を身につけることの意義を伝えている。授業アンケートの結果では、83%の受講者がこの授業で学んでいる情報の知識や技術をつかって、社会の課題を解決してみたいと意欲を示し、84%の受講者が情報に関する知識や技術をさらに学びたいと回答しており、本プログラムへの関心の高さを示すとともに学ぶことの意義も理解できていると思われる。</p>
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	<p>本学独自の取り組みとして「教員相互による授業見学」を実施している。学修者にとってより良い授業となるよう、教員がその授業を参観し、気付いてことをレポートにし被参観教員に提出する。レポートを受け取った被参観教員は、意見をいただいた参観教員に対して、レポートに対しての意見や気づきを返信し、教員相互に意見を述べ合う。この一連のレポートは学内の共有システムを利用し、教職員の中で公表の上、他の教員にも参考となるようにしている。本プログラムの科目においても同様の取り組みをし、特に内容・水準の向上を目指し「分かりやすい」授業を視点として実施するようにする。</p>